

〈特集書評論文〉

攪乱の暴力と向き合う

——竹村和子『境界を攪乱する——性・生・暴力』書評

清水 晶子



はじめに

境界の攪乱。そう、それがあたかも私たちの目指すべき——その〈私たち〉とはいったい誰なのかという問いを通して目指すべき——到達点であるかのように、あたかもそれを引きおこしさえすればたとえ小さくとも現状に何かしらの意味のある亀裂をうみだしたことになるはずのラディカルな達成であるかのように、そのように思われた一時期がたしかにあったことは、否認ないだろう。あるいは少なくとも、フェミニストやクィアの政治にかかわる理論的考察が境界の攪乱可能性を追い求め、見だし、押し進めることをほとんど最優先の課題としているかのような印象を与えた時期、そしておそらく実際に少なからずそうふるまっていた時期が、たしかにあったことは。もちろん、境界の攪乱と一口に言っても、たとえばアイデンティティの境界線がすでに無効であると、あるいはそれを横断してみせると、そう宣言すればそれで事足りるかのような夢見がちな議論から、境界線が偶発的でありかつ強制的であることを前提としつつ、そこに微細なずれや変容の可能性を切り開く隘路を突き止めようとする禁欲的な議論まで、個々の考察はさまざまではあった。同時に、〈境界の攪乱〉の追究が特権的な地位を占めることへの異議申し立ても、消えることなく存在していた。とはいえ、まさしくそのような異議申し立てがなされたことこそある一時期における（少なくとも英語圏の）フェミニズム／クィア理論のひとつの学術的潮流の証であった、とすることもできるだろう。

竹村和子著『境界を攪乱する——性・生・暴力』は、フェミニズム／クィア理論のそのような一時期——1980年代半ばから1990年代を通しての時期——を経たあと、すなわち2000年代に執筆された論考を集め、著者の没後に編集された遺著である。ここで〈あと〉を強調するのは、偶発的に決定された境界の侵犯と攪乱という課題が2000年代以降のフェミニストやクィアの政治と理論とにとってはすでに考えつくされた過去のものとなった、と主張するためではない。1990年代に英語圏の理論家たちが重視したこのテーマが2000年代にようやく日本でも論じられるようになったと示唆するためでもないし、ましてや、2000年代の竹村の考察をこの特定の〈一時期〉の議論の一端をなすいわば時代錯誤的なものとしてカテゴライズするためでもない。しかしそれにもかかわらず、本書を読むにあたって、この〈あと〉は——そのようにしてまたしても境界線を設定してしまう危険に注意を払いつつも——強調されなくてはならない。なぜなら、本書におさめられた論考は、繊細かつ勇敢な境界攪乱の試みに明確にかかわるものでありつつ、同時に、攪乱それ自体を寿いで終わることが可能であるかのような気分がもはやアカデミックな幻想としてすら保持できなくなった地点から書きはじめられたものであるからだ。フェミニストとクィアの理論と政治とにおいて「境界線を攪乱する」という試みに何が賭けられて来たのかを熟知しその試みに真摯に参入した理論家として、まさしくそうであるからこそ、境界線攪乱へのこの着目とその反面で何を見逃し、意図せざる何を呼び寄せてしまったのか、本書において竹村は、く

りかえし、かたちを変えて、その問いを問いつづける。本書の副題がいみじくも示すように、それは、性と欲望との編成を通じて可能な生の領域を統御しようとする制度の維持と変容とに纏わりつく暴力にかかわる問いであり、そして上述の〈一時期〉を経たあとのフェミニズム／クィア理論が、あらためてそして否応なく直面してきた、まさにその問いでもある。

1. 同一性の原理

しかし、〈あと〉について論じるためには、まずこの特定の〈一時期〉の議論とはどのようなものだったのか、とりわけそこで「境界線を攪乱する」ことがなぜ要請されたのかについて、簡潔に触れる必要があるだろう。

〈フェミニズム〉がまずもって問題とした境界線が〈男〉と〈女〉とを分かちはずのそれであったとしても、そこで境界づけられた〈女〉というカテゴリーがしばしばきわめて特定の——たとえば「第一世界」の、白人の、中流階級の、そして異性愛の——女たちのみをその構成員として念頭においてきたことへの批判もまた、フェミニズムにおいて長い歴史をもつ。「白人女性の政治とは異なる反人種主義的政治、そして黒人と白人との男性の政治とは異なる反性差別的な政治」をかかげた1970年代のブラック・フェミニズムを代表する文書のひとつである「コンバヒー・リバー・コレクティブ・ステートメント」にすでに明らかだったように（Combahee River Collective [1977] 2000, p.265）、〈女〉というカテゴリーの同一性をフェミニズムの政治の前提とすることへのこのような疑義は、境界づけられたはずのカテゴリーを横断する別の境界線のはらむ政治的重要性への着目に端を発するものであった。このような異議申し立てがなされたのは、言うまでもなく、人種に関してのみではない。「ステートメント」から10年以上を経た1990年に〈クィア理論〉の語を提唱したのは、フェミニズム映画理論において消去されるレズビアンの特異性にこだわりつづけたテレサ・デ・ラウレティスであった。コンバヒー・リバー・コレクティブとブラック・フェミニズムが（白人の）フェミニズムにおける人種主義と（黒人を含む）男性の性差別とを同時に告発したように、デ・ラウレティスが提唱したクィア理論が（異性愛主義的な）フェミニズムにおけるホモフォビアと（ゲイ男性による）ゲイ・リベレーション運動における性差別とに引き裂かれたレズビアンの差異、さらには「レズビアン相互の、レズビアンの中にある、諸々の差異」の理論化を要請するものだった（De Lauretis 1991, p. viii）ことは、忘れられるべきではない。

とはいえ、別の境界、別の差異の指摘が、カテゴリーの細分化——つまり、より繊細ではあっても〈内部〉の同一性はゆるぎなく維持されるような境界設定——をその目的とするわけにはいかないこともまた、明白であった。社会構築主義と脱構築の議論とを経由した1980年代のフェミニズム理論は、そもそもアイデンティティ・カテゴリーの同一性それ自体を批判の俎上にのせはじめていたのだ（Fuss 1989）。『境界を攪乱する』の第一章としておさめられた「『資本主義はもはや異性愛主義を必要としない』のか——『同一性の原理』をめぐるバトラーとフレイザーが言わなかったこと」は、1990年代半ばにジュディス・バトラーとナンシー・フレイザーとの間でかわされた議論（Butler 1997a; Fraser 1995, 1997）の批判的読解を通じて、差異の指摘とカテゴリーの同一性の批判というこのふたつの要請が孕む緊張を論じたものである。「セクシュアリティにおいて周縁化されてきた人々がみずからのセクシュアリティの公的権利と承認を求めて展開しはじめている運動のなかで、戦略化あるいは自明

化されるアイデンティティの政治（アイデンティティ・ポリティックス）に、社会構築主義はどのように接合しうるのだろうか」（竹村2013、p.4）という問いから議論をはじめた竹村は、カテゴリーが何らかの生得的本質をもつのか社会的に構築されているのかではなく、わたしたちの個別の差異がいかに所与のカテゴリーへと同一化されていくのかを、問題にする。個々のカテゴリーが「内面化、身体化、個人化」されて自己同一性を形成していくこと、それによって「歴史的な産物」であるカテゴリーが「本質のように錯覚され」強制力をもった境界線を維持していくこと、しかしだからこそそうして構築されたカテゴリーと個別の経験とのずれがその強制力への抵抗となること。竹村はそれを確認した上で、バトラーやフレイザーの議論においてまさしくそのようなカテゴリーの同一性が呼び戻される瞬間を鋭くとらえ、批判する。異性愛主義的な〈男〉と〈女〉の境界設定にもとづく「性の（再）生産様式」が資本主義体制と互恵関係をむすんできたことと指摘するこの論考は、この境界線をゆるがしカテゴリーの同一性を「脱構築」することこそを、重要な政治的課題としているのである。

カテゴリーの同一性への疑義、その境界線の攪乱という課題の一端は、本書に収録された中ではこの論文と並んでもっとも初期のもの（2001年）である講演録『『翻訳の政治』——誰に会うのか』にもうかがえる。翻訳における他者性——そして私たちの議論にとって重要なことにその暴力——をテーマとしたこの講演録は、「翻訳のなかで、翻訳として」発生する「他者との邂逅による自己の亀裂」を強調し（竹村2013、p.388）、多数の境界線に引き裂かれた非連続に身を晒しつつそれを生き延びようとすることを、翻訳テキストの「夢」として提示する。そのようなテキストの例としてここでとりあげられるのがグロリア・アンサルデュアの『ボーダーランズ／ラ・フロンティア』であることは、竹村がフェミニズム理論における境界と同一性をめぐる議論を当然に念頭においていることをも裏付ける（Anzaldúa 1987）。けれどもこの講演録に関してそれにも増して注目すべきなのは、この時点で竹村がすでに、もはや同一性の幻想を維持し得ない境界地域の雑種性を「手放しの礼賛にせず」、テキストに頻出する「戦場の比喩」と「暴力」とに対する（ヒロイックな楽観主義とは無縁の）こだわりを示している点である。境界性と雑種性とを生きるアンサルデュアのテキストに描き出される暴力のイメージが「安易な理解や、時間の共有性の幻想を打ち砕く」ことを確認した竹村は、それに続いて、本書を通底する——つまりは2000年代の竹村が取り組み続けた——問いを発する（竹村2013、p.393）。

しかしその暴力は誰が誰に向けているのでしょうか。あるいはその暴力は、日常の生とまったく異質な次元のものでしょうか。

同一性の脱構築あるいは境界の攪乱とかかわる〈暴力〉についてのこの問いは、本書において、緩く段階をふみながら二種類の暴力の考察へと焦点を結んでいるように思われる。すなわち、境界を攪乱する存在がそれ自身へと向ける自己破壊的暴力と、人間がそのようにして「液状化」（竹村2013、p.337）した後に、いやむしろまさにそのただ中で、それを通じて、発生する暴力である。

2. 身体の破壊と自死的暴力

『境界を攪乱する』がこの二種類の暴力への考察を展開するのは、おもに第三部「バトラー解説」と第四部「生政治と暴力」におさめられた論考においてだが、そのいわば直前におかれた第二部第四章

「修辭的介入と暴力への対峙——〈社会的なもの〉はいかに〈政治的のもの〉になるか」（初出2004年）では、「自己（あるいは自己で非ざる者）の形成過程に埋め込まれる暴力性」が取り上げられる（竹村2013、p. 122）。ここで竹村が注目するのは、〈ペニス=ファルスをもつ者〉と〈もたない者〉とを公／私の領域にふりあてかつその両者の不安定な境界をめぐる抗争を糊塗する異性愛的な性別の二分化が、自己の内部の矛盾や暴力を外部に設定された他者へと照射することで自己を維持していく、そのシステムである。

内部に生じている矛盾・葛藤は、〈女性的なもの〉と〈男性的なもの〉という二つの形態（「形式」と詐称されている）に割り振られて演じられ、欲望の異性愛化という両者の補完作用によって目くらましされる。そして馴化された内なる暴力は、〈女性的なもの〉を比喩化した外部（階級・人種・民族・宗教……において捏造された他者）へと向けられていく。（竹村2013、p.121）

近代的な自己／他者の境界構築にまつわるこのような暴力的作用を批判的に明らかにし、その機制への攪乱的介入をはかる企て自体は、しかし、まさしく1990年代のフェミニズム／クィア理論において集中的になされたものである。とりわけ、本書の第Ⅲ部が繰り返し論じるジュディス・バトラーを筆頭に、1980年代後半から1990年代のクィアの理論家たち（あるいはフェミニズムの理論家と言っても良い——竹村も示唆するように、この両者は「まったく別物」（竹村2013、p.78）ではないからである——）にとって、この暴力は、同時代の英米におけるAIDSの流行と同性愛嫌悪の高まりに密接な関連をもつ、切迫した問題だった。維持され保護されるべき生と、生としての価値を認められず死へと追いやられる生、ウィルスがその境界を易々と超えて〈内部〉と〈外部〉、〈自己〉と〈他者〉との区分を限りなく不安定にする。そしてだからこそ、境界維持の要請はますます暴力的に強められる。AIDSの流行はその機制を露骨に可視化したのだったし、それに対する攪乱的介入の可能性の探求は文字通り生死を左右しうる課題だったのだ。

むしろ竹村の論考で重要なのは、そのような攪乱もまた暴力と不可分だという指摘である。

ある社会構築をべつ社会構築へと作りかえようとする「政治」は、（中略）そのかぎりにおいて、表象領域——すなわち社会／身体領域——に対して暴力的な介入がなされるはずである。（竹村2013、p.119）

これは、第Ⅲ部で展開されるバトラーの批判的読解に忠実に呼応するものと言えるだろう。たとえば第六章「いかにして理論で政治をおこなうか——『触発する言葉』訳者あとがき——」は、アルチュセールの呼びかけを通じた主体形成が一度きりではなく何度も、そして身体レベルで、繰り返されるなかで、その歴史性から「新しい文脈、新しい身体」の契機があらわれる、というバトラーの議論の攪乱的な政治性を評価しつつも、同時にこう指摘する——「身体レベルでの攪乱性は（中略）従来の身体の破壊としても論じられなくてはならない」（竹村2013、p.157）。実際、境界線攪乱にかかわるバトラーの、とりわけ初期の議論は、大きくふたつの流れをもつと言ってよい。パフォーマンス性をめぐる考察（バトラーにとってこれは、先行する言説の強制力を伴う引用と反復とがその引用元をさかのぼって自然化、実体化する作用を指す）と、喪失とメランコリーをめぐる考察（同性愛タブーがひきおこす愛の

対象の喪失がメランコリックで反隠喩的な体内化を通じて〈文字通りに〉性別化された身体をうみだす)とである(Butler [1990] 1999, 1993)。バトラーの初期の議論に関してもっとも良く知られているのは、言説の引用と反復のずれが引き起こすパフォーマティブな攪乱と変容可能性という論点である。しかしそれは、歴史的に沈積され〈実体化〉した身体の、安易な変容を困難にする——もちろんそれは変容が不可能であるということではないのだが——〈物質性〉についての議論と、表裏をなしていたのだ。とはいえ、たとえばトランスセクシュアルの身体に関連してジェイ・プロッサーが、あるいは病理化される身体に関連してエレン・サミュエルズが批判したように、バトラーの〈身体〉がしばしばその〈身体性〉や〈物質性〉をおきざりにするように見えるという指摘もまた、的を外れたものではない(Prosser 1998; Samuels 2011; 清水2013)。言うまでもなく、そのように〈物質性〉として認識される〈身体性〉もまた構築されたものであり変容可能なものであると示すこと、換言すれば身体と性に関する〈物質性〉の境界線それ自体を攪乱することこそ、初期のバトラーの議論の真価はある。しかしそれは裏返って、沈積を通じて〈実体化〉された歴史をもつ身体が変容や攪乱を暴力として経験する可能性について、彼女の考察を不十分なままにとどめているのではなかろうか。「従来の身体の破壊」に目を留める竹村の指摘は、まさにこの点を突いているのである。

興味深いことに、竹村のこのような視点は、一見それとは逆方向をむいているかに思われる論考、境界線の横断と攪乱——そして脱構築——の重要性を説く論考においても、消え去ることなく維持されている。第九章「デリダの贈与——脱構築／ポリティックス／ポスト性的差異」は、パフォーマティブな脱文脈化をめぐるバトラーによるデリダ批判とデリダを経由したペギー・カムフによるバトラー批判とを照らし合わせながら(Butler 1997; Kamuf 2005)、それを「あらゆる発話行為が有する構造としての脱文脈化が、どのように歴史性を獲得しえるか」(竹村2013、p.203)という問いへと発展させるべきだと主張する。「性的差異の意味づけなおし」の可能性を脱構築的な「散種」に見いだそうとする本章は、意味を書き込み／かき消し続けるような「テキストとしての身体／身体としてのテキスト」に注目することになり、その限りにおいて、脱文脈化それ自体を暴力として経験する「従来の身体の破壊」を論じるものではない。しかし竹村はこの論考の終盤で「死を遠ざけ、生を組織化してきた」近代の機制を脱構築する必要を説いて、やや唐突に次のように述べる。

脱構築の視点から導き出される「死」について——生がみずからにふるう暴力について、その言語的表出について——思考する必要があるのではないだろうか。(竹村2013、p.211)

この「言語的表出」がまさしく「構造としての脱文脈化」の歴史的な表出を含意していることは続く一節で明らかにされる(「脱構築が語る非歴史的な生／死が、バトラーが批判する歴史的な言説暴力となってどのように表出することになったのか」)。「非歴史的な生／死」ではなくその歴史的で具体的な表出としての暴力。そこには、生を統制する境界設定の暴力とともに、歴史的に沈積され〈実体化〉された身体が境界攪乱にあたって経験する暴力もまた、否応なくふくまれるだろう。いや、それどころか、「生に内包される」あるいは「生を生として統御する」暴力ではなく、「生がみずからにふるう」暴力という竹村の表現が示唆するのは、むしろ、みずからを破壊しながら境界攪乱をひきおこす身体が経験する後者の、いわば自死的暴力の方ではなかろうか。

自死的暴力への批判がより明確にあらわれるのは、アンティゴネーをめぐる考察を展開する第十三章

「暴力のその後……——『亡霊』『自爆』『悲嘆』のサイクルを穿て——」である。公／私、男／女、共同体／個人の領域を峻別し統御しようとする〈法〉は、侵犯者への有罪宣告→有罪者の暴力的喪失→喪失対象のメランコリックな喪失→破壊と自死的暴力→有罪宣告というサイクルを駆動させながら、結局のところ、有罪者の悲嘆とそれによって引き起こされる暴力を再包摂し、有罪を宣告しうるものとしての〈法〉自身を遡及的に強化していく。竹村によれば、暴力と再包摂とのこの循環をぬけだすには、喪失をメランコリックに——つまり、暴力的にもたらされた喪失を喪失として認めないままに——解決するのでも、悲嘆を他者に対する有罪宣告へと振り向けるのでもなく、喪失されたものを吊う「追悼」とそれへの応答が必要である。この点において竹村は、共同体に反抗するアンティゴネーを「没落に向かわざるをえない」形象としてとらえたヘーゲルのみならず、自死に至る彼女の抵抗を「新しい社会形態」を可能にする公的メランコリーと呼んで評価したバトラーとも、袂を分かとうとする (Hegel [1931] 1949; Butler 2000)。法にその追悼を禁じられた喪失のもたらすメランコリーが追悼者の文字通りの自死にいたる時、それは公的な追悼の言説が触れられない領域をこじあけるのではなくむしろその領域の内部にとどまることになる、という竹村のバトラー批判は、それ自体説得力がある。しかしここで注目したいのは、竹村がこの時にふと漏らす疑問である (竹村2013、p.310)。

ここでバトラーは、「暴力」「宿命的罪」を、「新しい社会形態」の出現のために、やむを得ず引き受けなければならないものと捉えているようだ。だがその「暴力」「宿命的罪」という言葉に、バトラーはどれほどの現実感を与えているのだろうか。

「現実感」がより厳密に何を指すのか、竹村はそれ以上踏み入ってこの用語について論じようとはせず、この一節はなかば宙に浮いたままに放置されているようにも見える。けれども、本節がここまで追ってきた竹村の議論を思い返せば、そして、アンティゴネーに対する懲罰としての「生きながらの死」と彼女がみずからにもたらす「実際の死」とをバトラーは峻別し損ねているのではないかという竹村の指摘を考えれば、この「現実感」の少なくとも一端が〈実体化〉された身体の破壊とかかわることは明らかである。〈法〉の措定する境界線を攪乱するどころか再包摂されてそれを強化してしまうメランコリックな暴力の連鎖への批判という、いわば本章の中心をなすロジックは、またしても、竹村の論考で展開されないままに繰り返し顔を出し続けるあの問い——境界攪乱を引き起こす身体が経験する破壊的暴力をどう考えるのかという問い——を、その背後に潜ませているのだ。だからこそ、それに続けて出てくる問いは、次のようなものになる。すなわち、〈法〉の維持にかかわる暴力（「戦争・脅迫・一時的協定を繰り返すホモソーシャルな磁場」）と、境界攪乱の暴力（「アンティゴネーが『新しい社会形態』のために呼び起こす暴力」）とのあいだに、「何か違いがあるのだろうか」（竹村2013、p.311）。

3. 液状化した人間

境界攪乱にともなう身体破壊的な暴力への竹村のこのこだわりは、攪乱を包摂しあるいは乗り越えて生き延びるのはいかなる身体なのかという、フェミニズム／クィア理論において2000年代に前景化された重要な問いにつながるものである。第四章で「通常の物語に抗して自己が立ち上がる」ときに出現するベルサーニ的な「自己解体の享楽」の暴力性 (Bersani 1986) ——それは同時に「波動的に外部に向

かって」暴力を生みだすものでもある——が批判的に論じられているのは、その点で興味深い。ホモフォビックで規範的な男性性への「自殺的に」受動的な——すなわち（ベルサーニによれば）女性的な——同一化を通じたゲイ男性のラディカルな自己攪乱の可能性を説くベルサーニに対して、キャロル＝アン・タイラーは、このような同一化は〈他者〉として設定された存在との「一見したところ同一化であるような形をとった非同一化」に過ぎない、と批判を向ける（Bersani 1987; Tyler 1991）。換言すれば、ここでの「自殺的」な同一化を通じた攪乱はゲイ男性主体を〈文字通り〉死に導くものではないが、その一方で、まさに「自殺的」な存在として同定^{アイデンティファイ}される女性性には攪乱を生き延びる非同一化のチャンスは与えられないのだ（「直腸が墓場であるとき、明らかに、臆はただの行き止まり^{dead end}である」（Tyler 1991, p.40強調引用者））。

誰が攪乱を乗り越えて生き延び、誰がデッド・エンドに突きあたるのか。フェミニズム／クィア理論においてこの問いが政治的重要性を増しながら浮かび上がってくるのは、AIDSのパニックと同性愛嫌悪の高まりを経て英米における性的少数者の権利が多少なりとも拡大しはじめた90年代後半から2000年代のことである。たとえばロバート・マクルーアは、身体が正常／異常、異性愛／同性愛、健常／病や障がいという強固な境界線にもとづいて統御され、後者の身体が前者を常に脅かすものとして暴力的に排除される、という機制それ自体が、90年代後半以降のアメリカ合衆国においては変容しはじめている、と指摘する（McRuer 2006）。そのかわりに前景化されるのは、そのように脅かされ危機を迎えつつもその危機を乗り越えそれを包摂して生き延びるだけの〈柔軟性〉をもつ、寛容で十全な——そして異性愛的で健常な——身体である。逆に、非異性愛的な、あるいは健常ではない身体は、異性愛的で健常な身体の十全性を保証する存在として包摂されるか、あるいは黙って消え去るか、そのどちらかを選択するよう要請されるのだ。ただし、ここでの〈柔軟性〉はあきらかにタイラーの指摘した「同一化の形をとった非同一化」に通じるものであり、それを考えれば、〈柔軟に〉危機を乗り越えて生き延びる身体とそのため利用される身体とを分かち境界線は、必ずしもマクルーアが主張するような異性愛／同性愛の軸に沿うわけですらない。むしろ、とりわけフェミニズム／クィア理論にとって問題になってくるのは、境界攪乱の可能性を開こうとする政治的追求が、実際には攪乱を生き延びることのできる〈柔軟な〉身体以外の——つまりは、攪乱の暴力に晒されて破壊されかねない——身体をあらかじめ排除してきたのではないのか、という点であった（Puar 2009; 井芹2013）。

この文脈において、破壊される身体に対する竹村の注目は、2000年代のフェミニズム／クィア理論の試み——ディスアビリティ理論ともたがいに交錯しながら歴史的に〈実体化〉された身体の生存と破壊とをあらためて考え直そうとする試み——と確実に接続される契機を内包していたと言える。しかしながら、『境界を攪乱する』におさめられた論考は、それ以上〈実体化〉された身体と直接にかかわる考察を展開することはない。そのかわりに竹村が取り組むのは、境界の攪乱をいわば滋養にして存続するシステムと、それによって産み出されそれを支える「人間主体を液状化させる暴力」（竹村2013, p. 335）という問題である。この点に主眼をおいた論考は主に本書の第IV部におさめられているのだが、そこで繰り返し強調される竹村の現状認識は、そもそも従来のフェミニズム／クィア理論が〈攪乱〉しようとしていた〈境界〉自体が「液状化」しており、私たちの生が経験する暴力はまさにその「液状化」にかかわっているのではないか、というものだ。

そもそも男性性／女性性や主体／他者の明確な区別を要請していた近代のドメスティック・イデオ

ロギー自体が、資本主義の展開、とくにグローバル資本の隆盛によって、国内的にも、また国境を挟んでも、当初のイデオロギー的必要性を失いつつある。(竹村2013、p.367)

この一節の引用元である2008年初出の第十五章「『戦争の世紀』のフェミニズム」は、このような境界線の液状化がもたらす「別様の暴力のかたち」を、ジョルジョ・アガンベンをひきながら「バイオポリティクスが『致命的マシーン』化する時代」と結びつけて論じるのだが、この結びつきをより詳細に述べているのが、それと同年に書かれた第十四章「生と死のポリティクス——暴力と欲望の再配置」である。アガンベンによれば近代民主主義社会は「『死』によって、『他者』として登録される者たち」であるホモ・サケルの殺害と排除の制度化を通じて維持されてきたのであり、従って、それは常にホモ・サケルの殺害につきまといわれている(竹村2013、p. 338; Agamben 1998)。このメカニズムが加速度を増していくなか、〈市民〉を規範的に統制し生産していくフーコー的な生政治は、その裏に貼り付いたデス・ポリティクス——竹村はこの用語を採用しているが、これはアキユ・ムベンベが唱えるネクロ・ポリティクスと同じものを指すと考えられる(Mbembe 2003)——をますます前景化していく。しかしここで「アガンベンの議論には盲点がある」と竹村は指摘する。すなわち、アガンベンはこのようなメカニズムを明らかにし「殺害されるホモ・サケル」を論じるものの、ここでは「自らの手でホモ・サケルを殺害する『市民』の考察」はなされていないのではないかと(竹村2013、p.340)。アブグレイブ収容所での虐待を例にとりながら、竹村は、〈市民〉が〈市民〉としてシステムに従属するなかで——まさにその従属のゆえに——ホモ・サケルの実際の殺害者となり、そのいわば〈市民〉らしからぬ暴力を理由として自らがホモ・サケル化されていく様相を描き出す。〈市民〉とホモ・サケルとの境界が限りなく不安定なものになる——つまり人間主体が「液状化」している——現代社会において、〈市民〉は「市民性の定義を突き破り、自らの暴力によって自らが社会から放逐されるという自死的暴力の淵に」駆り立てられるのである(竹村2013、p.351)。

したがってここでも竹村は、〈市民〉をかたちづくる境界線の攪乱それ自体にそれだけで何らかの抵抗の可能性を見ることに対して、懐疑的である。第十二章「マルチチュード／暴力／ジェンダー」は、その点においてアントニオ・ネグリのマルチチュード論に疑問を投げかける。ネグリによれば、〈社会〉からはじき出された不安定な〈生〉の「内なる非連続性」が「情動や感情といった(中略)動的な変容性を秘めたエネルギーをバネにして」生権力に対抗する〈共^{コモン}〉を切りひらく(竹村2013、p.283)。しかし、そのような生——人間というカテゴリーが液状化してしまっているような人間——が実際に〈共〉に結びつくのだろうか、まずはそのような人間によって「現実^{リアル}にふるわれる暴力」を考察する必要があるのではないかと(竹村2013、p.285)。竹村のこの批判において、「現実^{リアル}にふるわれる暴力」とはすなわち〈市民／ホモ・サケル〉が駆り立てられる「自死的暴力」である。そして、自死的暴力における身体の破壊についての竹村のこだわり——実際、「現実^{リアル}にふるわれる暴力」という表現は前節で確認した竹村によるバトラー批判(「[暴力という言葉に] どれほどの現実感を与えているのだろうか」と見事に響き合う——を考えれば、人間主体の「液状化」にかかわる彼女の議論が、〈実体化〉された身体の経験する暴力に関する考察と結びつこうとしていたのは、明らかだろう。残念ながら『境界を攪乱する』においてその両者を明示的につなぐ論考は存在しない。しかし、ふたたびフェミニズム／クィア理論の文脈にもどるならば、著者である竹村の早すぎる死によって展開されることなく断ち切られてしまったこの結びつきにこそ、現代のフェミニズム／クィア理論の理論家としての彼女の真髓^{コア}がうかがえるので

はないか。現代の〈死の政治学〉、近代的な性別やアイデンティティに基づく統御と包摂／排除ではなくどこまでも拡大する包摂とその内部での恒常的な死のリスク管理、そこにおける主体のいわば「液状化」。それらは言うまでもなくフェミニズム／クィア理論においても取り上げられてきた問題である (Puar 2007, 2009; Berlant 2011)。とりわけ、境界の攪乱と越境とを主張してきたクィアの議論においては、境界の液状化を糧としながら拡大する新自由主義的な資本主義の要請に意図せずして応えてきたのではないかという観点からも (Hennessy 2000; Puar 2011)、このような「液状化」をあらためて捉え直すことは重要な課題の一つとなってきた。たとえば、ディスアビリティ理論、情動理論やポストヒューマニズムとフェミニズム／クィア理論とを交錯させながら資本主義の生／死の政治のもとにおかれた身体を考えようとするジャスビル・プアの試みは、竹村の考察と方向性が重なる部分も大きいと言えるだろう。けれども、主体や身体の——個別の〈人間〉の——境界がすでに成立せずまさしく流動的ではないことを強調するこれらの議論がまだ明らかにしていないのは、あるいはむしろ、明確な問いを立てそびれているのは、次の点である。すなわち、流動的であると同時に個別の歴史的な沈積によって〈実体化〉されてもいる身体は、その流動性をどのような「現実の」暴力として経験し、それをどのように「暴力 (パワー)」ではなく「革命的力 (パワー)」へと変容できるのか (竹村2013, p.285)。たしかに『境界を攪乱する』はそれらの問いへの答えを提示してくれるものではない。けれども、それらの問いに至る道筋を示し、私たち読者がそれらの問いを問わざるを得ないところまで私たちを連れていく、私たちはまさしくそこに2010年代のフェミニズム／クィア理論の書籍としての本書の真価を見るべきではなかろうか。

4. おわりに

『境界を攪乱する』所収の論考の中ではもっとも近年のものの一つである第十一章「生政治とパッション (受動生／受苦) ——仮定法で語り継ぐこと」(初出2010年)は、その結語部分で、このような液状化の暴力への「抵抗」の希望を、こう語る。

人間の境界を液状化しながら肥大する生政治への「抵抗」がもしありえるとすれば、それは、存在論化あるいは原理化された形象のなかに見いだされるのではなく、生政治のただなかで、それが生み出す「生」と「死」が重なり合う地点で発せられる「語り (に非ざる語り)」のなかに、かろうじて見いだすことができるのではないだろうか。(竹村2013, p.267)

これだけをとれば、〈実体化〉された「現実」の身体の破壊から言語と語りの可能性へと竹村の議論の焦点が移行したようにも思えるかもしれない。しかし、メルヴィルの『代書人バートルビー』を扱うこの論考が、バートルビーの「仮定法の語り」(「できれば、しないほうがいいのですが」)を巡る議論を注意深くたどりながら、バートルビーが最終的には死に至るというその一点、その「重態性や、問題の火急性」に、それこそ取り憑かれたように繰り返し立ち戻るということを、忘れてはならないだろう。竹村は、バートルビーの死に新しい秩序の創造を見ることにも、あるいはそれを革命的な根本的拒絶として称揚することにも、頑なに同意しない。彼女が唯一(「かろうじて」)希望を見いだすのは、みずからも液状化の暴力にさらされて文字通り「生」と「死」の間にいる語り手が、もはや正当な〈人

問)の語りからは滑り落ちつつある語りをバートルビーから引き継いで行く、その試みなのだ。その試みに実際に希望を、そして竹村の問いへの答えを、見いだせるのかどうか、それはまだわからない。けれども、人間を「液状化」する暴力、そして「液状化」した人間がふるう暴力について論じながら、あくまでもそれを抽象化せず(「存在論化あるいは原理化」せず)、「現実にはふるわれ/た」「身体を破壊する/した」暴力として考え続けること。『境界を攪乱する』を読む私たちは、その要請を受け、その地点から、語りをはじめなくてはならないのである。

(しみず・あきこ/東京大学大学院総合文化研究科准教授)

参考文献

- 井芹真紀子「フレキシブルな身体——クィア・ネガティビティと強制的な健常的身体性」クィア学会『論叢クィア』Vol.6 (2013) : pp. 37-57.
- 清水晶子「喪失にあつて語るということ——セジウィックの「白いめがね」とアイデンティフィケーションをめぐるアンビバレンス」中央大学人文科学研究所編『愛の技法——クィア・リーディングとは何か』中央大学出版部、2013年。
- 竹村和子『境界を攪乱する——性・生・暴力』岩波書店、2013年。
- Agamben, Giorgio. *Homo Sacer: Sovereign Power and Bare life*. Trans. Daniel Heller-Roazen. Stanford: Stanford University Press, 1998.
- Anzaldúa, Gloria. *Borderlands/La Frontera: The New Mestiza*. San Francisco: Aunt Lute, 1987.
- Berlant, Lauren Gail. *Cruel Optimism*. Durham, NC: Duke University Press, 2011.
- Bersani, Leo. *The Freudian Body: Psychoanalysis and Art*. New York: Columbia University Press, 1986.
- . "Is the Rectum a Grave?." *October* 43 (1987) : pp.197-222.
- Butler, Judith. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. 1990. New York and London: Routledge, 1999.
- . *Bodies that Matter: On the Discursive Limits of "Sex"*. New York and London: Routledge, 1993.
- . a. "Merely cultural." *Social Text*. 52/53 (1997) : pp.265-277.
- . b. *Excitable Speech: A Politics of the Performative*. New York: Routledge, 1997.
- . *Antigone's Claim: Kinship between Life and Death*. New York: Columbia University Press, 2000.
- Combahee River Collective. "The Combahee River Collective Statement." 1977. In Barbara Smith ed. *Home Girls: A Black Feminist Anthology*. 1983. New Brunswick, New Jersey: Rutgers University Press, 2000.
- De Lauretis, Teresa. "Queer Theory: Lesbian and Gay Sexualities." *differences*. 3.2 (1991) : pp.iii-xviii.
- Fraser, Nancy. "Recognition or Redistribution? A Critical Reading of Iris Young's *Justice and the Politics of Difference*." *Journal of Political Philosophy*. 3.2 (1995) : pp.166-180.
- . "Heterosexism, Misrecognition, and Capitalism: A Response to Judith Butler." *Social Text*. 52/53 (1997) : pp.279-289.
- Fuss, Diana. *Essentially Speaking: Feminism, Nature and Difference*. New York and London: Routledge, 1989.
- Hegel, G.W.F. *The Phenomenology of Mind*. 1931. Trans. J.B. Baillie. New York: Dover Publications, 2003.
- Hennessy, Rosemary. *Profit and Pleasure: Sexual Identities in Late Capitalism*. New York and London: Routledge, 2000.
- Kamuf, Peggy. "The Other Sexual Difference." In *Book of Addresses*. Stanford: Stanford University Press, 2005.
- Mbembé, Achille. "Necropolitics." Trans. Libby Meintjes. *Public Culture*. 15.1 (2003) : pp.11-40.
- McRuer, Robert. *Crip Theory: Cultural Signs of Queerness and Disability*. New York and London: NYU press, 2006.
- Prosser, Jay. *Second Skins: The Body Narratives of Transsexuality*. New York: Columbia University Press, 1998.
- Puar, Jasbir K. *Terrorist Assemblages: Homonationalism in Queer Times*. Durham, NC: Duke University Press, 2007.
- . "Prognosis Time: Towards a Geopolitics of Affect, Debility and Capacity." *Women & Performance: A Journal of Feminist Theory* 19.2 (2009) : pp.161-172.
- . "Coda: The Cost of Getting Better Suicide, Sensation, Switchpoints." *GLQ: A Journal of Lesbian and Gay Studies* 18.1

(2012) : pp. 149-158.

Samuels, Ellen Jean. "Critical Divides: Judith Butler's Body Theory and the Question of Disability." *NWSA Journal* 14.3 (2002) : pp. 58-76.

Tyler, Carole-Anne. "Boys Will be Girls: The Politics of Gay Drag." In Diana Fuss ed. *Inside/out: Lesbian Theories, Gay Theories*. London and New York: Routledge, 1991.